
『模倣小説』 雪天使 ~お前に捧ぐカノン~

シー様（水嶋ヒロ + 齋藤智裕） = 十字軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『模倣小説』 雪天使 くお前に捧ぐカノンく

【Nコード】

N6451P

【作者名】

シー様（水嶋ヒロ＋齋藤智裕） 〓 十字軍

【あらすじ】

読めば寂しい思いになったり怒りがこみ上げる話

国はラスベガス。貧困地区のホームレスたちは飢えていた。華やかなカジノや高級車を目の前でチラリと見て、立場の違いに絶望する。

しかし、そんな中でも平気な人は居る。例えば生まれながらにホームレスだった者は、贅沢をした事がない。絶望は日常であり、心の抱くのは希望のみで、金持ちに嫉妬したりしない。そのホームレスの年齢は6歳、女

少女は今、大切な親に別れを告げている。

判れるのは教会の神父で、歳は80頃。老体により衰弱して今にも死にそうである。

少女の親代わりだった神父さんの手を握り少女は語りかける。

「神父様！　しっかりして！」

「……この孤独な……老いぼれ……なんかの……最後を看取ってくれる……者がいて……心から……幸せに思うよ……」

「さいごなんて言わないで！ 神父様がいなくなったら私……！
またひとりぼっちになっちゃうよぉ……！」

「どうか泣かないでくれ……私の可愛いカノン……。大丈夫……。必ずお前の側で……見守っているから……。」

「いやよ！ いやいや……！ おねがい！ 行かないで……！」

……ここは古ぼけた木造教会。貧乏であり市街から離れた場所での行き交いも無い。
賑やかなラスベガスのある国で車の音も何も無い静かな時が、2人を包み込んでいた。

<背景は こんな感じ <http://432.mitemin.net/i2601/>>

少女のまぶたに思い出が蘇る。

神父さんとの思い出がフラッシュバックする。

虐められた時は、抱きしめてくれた。一緒にごはんを食べた。一緒にごはんを作った。笑っていた。

その楽しい思い出も、少女は涙を流す事で己の不幸を自覚する。

一番必要であった筈の家族を今、失った・・・その悲しみは6歳には耐えられない。

先ほどの別れを思い出し涙せざる負えない。

この涙は、世界で誰一人として気付いてやれない。

夜、煌びやかなネオンに色取られて幸せしか知らない者建ちに2人の不幸が判るはずも無く。

幸せの宴が聞こえる世界は、残酷にも残された一人の子供に笑いかける様。

だが、少女にとっては、それはどうでもいいこと。

少女は、ただ、目の前で最愛の人の死を受け入れて涙するだけ。

犬のうん子を掴んだ少年が、2人の前を横切ろうとも・・・

犬のうん子を掴んだ少年が、それを味見したかもしれない世界の6年後にて

『実写版ちびまる子ちゃん』の世界観で花輪君の豪邸そっくりな家に青年がいる。

青年15歳は、金持ちなりにイケイケの服をコーディーネート。

とはいえ、これからバイクにどきゅんとぶつとばす為、意外と派手でもない。

ただのライダーズを着用

「おやお坊ちゃま。お出掛けですか？」

黒い執事の田中さんかと思う様な風貌が声を発した。

「目的地まで、御車で御送り致しますようか!?!」
はなわ家の『ジイ』らしく振舞う田中に似た召使。

「いやいいよ。どうせ暇潰しで適当にその辺、ぶらついてくるだけだから」

恩着せががましいということか？

うざいんだよ。クソジジイ！耳にタコが出来る程、聞いたわ!!という表情はしてなく、クールボーイ・・・タぐれの様な表情である。

「お気を付けて行ってらっしゃいませ!？」

ジイは最後まで見送る。ストーカーの様なまなこで見送るが、それは私の被害妄想だ!

実に清潔感漂う流れに、私は不愉快な気持ちでクールボーイを見ていた。

だって「おつす!オラXXXX!」みたいなテンションで執事に挨拶するんだよね。

もう、これは論外だし、書き直し、台詞を無かった事にする。

そうしてクールボーイは馬にまたがり颯爽に走る。
風を切る。

途中、切られた人がいるが気にしない。それは所詮、私の被害妄想だから。

畜生！！

この豪邸にはデカイ庭があるじゃにか！

いつになったら、家から出られるんだくそが！

しかも、門番までいやがるぜ！

派動拳派動拳

「……大変申し訳御座いませんがお坊ちやま……まだ未成年ですし、無免許ですので運転は……」

はああ？ 無免許で波動拳かよ。そりゃあ、門番に引き止められて当然だ。

さあどうする？ この窮地をどうやって波動拳無しで乗り切るつもりだ？

そうか。なるほど、昇竜拳で乗り切るツモリか……私が甘かった。

<昇竜拳の説明>

昇竜拳とは、しょうりゅうけん。いわゆる商流権の事である。

商売人のごとく人の心理を読み解き、得を得る。その得を得る特権を行使する事を……

・
・
・
・

もういいや。つかれた。

とにかく青年は買収した。

己の特権を生かして古いバイクを門番に差し上げる提案をした。

でも、門番も門番たる務めを忘れちゃいない。

万が一買収されたら旦那様にバレれば、リストカットされる様にリストラされるからだ。

だが、おぼっちゃんの印象が悪くなるのも困る。

嫌われてしまえば、いずれ将来、リストカットされる運命になる。

門番は悩んだ。悩み抜いた。

そして一つの答えに辿りついた。

「見なかった事にしよう。頑張つて引き止めた振りをしてしよう。」
そうです。困った振りをしてれば、おぼっちゃんに、罪悪感を植えつける事ができ、最後に生きてくる。

バイクを貰えば恩を与えられた貸しを受けてしまい、余計に面倒ことになる。

万が一、バイクが旦那様に見つかればそれこそ・・・

門番の思いをよそにクールボーイは門を飛び出し走る。走る意味は何なのかを探し求める様に・・・

ようやく外に出て風を切るように走ると、もう一個、門があった。

またも、門番Aのごとく、ごねられる。しかし、逆らえない。
無駄な時間を過ごした時間は、この時点で5分も経っている。私が風呂に入れる時間あるかもしれない。

ともかく青年は青春する様に走る。まるで映画のワンシーンを長距離走するかの様

実に羨ましい。ひっきーのオレには根本的に何か違うものを感じる。

オレだけじゃないな。世界中から冷たい眼差しが豪邸に注がれた筈だ。

メイドやら羊やら、プールとかでワンダーランド・・・

青年が家に帰るまでには超豪華料理が振舞われる予定だろうから、コックも忙しくしてる。

そのコックもきつと皆と同じような思いをしてるのだと思う。だから料理に陰毛を混ぜるのだ。

庭師だってそう。庭なんか手入れしてないし、振りしてるだけ。

全ての植物は人口物で花さんとか最初から屍だよ。

あーもう。嫉妬するなんて情けない！

おしなで おしなで！

つじつまが合わない話(前書き)

オレからのクリスマスプレゼントだよねw

つつつまが合わない話

< 女視点 >

しなびてヨレよれの服を着た女は政府管轄の服の無料配布場所リサイクルボックスに居る。

キャラ的イメージは貧困なストリートチルドレン
ドラマ「僕たちの勇氣 未満都市」で出てくる役者達のような雰囲気
である。

リサイクルボックスにて服の提供を受ける。

車の行き交う大通りで騒音が鳴る。ボックスを管理してる係りの公務員と女は会話をしている風であるが、騒音に聞き消される。

女は中古だが綺麗な服を受け取り、笑顔で帰る。道路の大通り沿いを歩き、しばらくすると、路地裏に入る。

参考画像

<http://432.mitemin.net/i2575/>

そこで2人のスラム街の荒くれ者的な女に囲まれる。

女たちあ高圧的な態度で不良ばく言う

女A「お、あんた、いいもん持ってるじゃん。

女B「ほんと、ほんと、

言われた側の女の名はヤッハシ。短かくしてヤシ

ヤシは困った顔をしてる。

女A「あたいのこの服、みてよ。凄くボロボロじゃない？

女B「ほんとだ〜 こりゃああ、可愛そうだ〜

ヤシは無視しようとしてくる。

女たちに取り押さえられる。

女A「あんたさ〜、やさしさってないの？

B「そうそう。可愛そうな人を見捨てて、自分だけ、いい服着ようつての？、それずるいんじゃない？

おどおど、まるでイカリしんじ風

ヤシ「た、たのみに行けば、も、もらえ・・・

A「はあ？ あたしらは、あそこを何度も利用しているのは、あんただって知ってるだろう。

にらむ2人

ヤシ沈黙

そこへ、豪邸の青年名が通りかかる。青年の名はエイプリルフル、略してエルが路地裏の手前にバイクを停車する。

エルは路地裏とは、25m程、離れていて、女たちのやり取りに気付いてない。

エルは信号待ちをしている。

ヤシを睨む2人の状況は変わっていない。

ヤシは沈黙の後、嫌々ながらも2人に服を渡す。

女Aがヤシから服を奪おうとしたそのとき、

ヤシの手をがっちり握りる者が現れる。

その者は女、風貌は17歳くらい。

12歳程のヤシと2人の女は、身長の違いを見上げる。

ヤシ「お、お姉ちゃん！

ヤシの表情が安堵する。お姉ちゃんの名は略してアン。

アン「ヤシ！ また虐められてたね。嫌な事があったら嫌だとハッキリ言わなきゃ。

ヤシは塞ぎ込む。塞ぎ込む姿を見て、2人の女児は自分達の顔を見

上げてキョトンとする。

「あ!!!」

お姉ちゃんはふとつ閃いた様に、大声をあげる。いきなりの大声に2人の女兒、一瞬びくつく。

ずかずかと2人に詰め寄るアン。Aの顔を覗き込み。そしてBの顔を覗き込む。

2人は、まるでさっきのヤシの様に怯え始めた。

女A「な、なんだよ・・・、文句あるのか。

アンはそれを聞くなり笑顔になり大きく手を振りかぶり、殴る体制
2人は恐怖で目をつぶる。

気付くと頭を撫でられてる2人。
困惑する。

「こんどから、ウチのヤシを苛めるときは、堂々とやれ! こんな狭い場所(路地)でやられたら、道がふさがれてカナワン!
アンは2人を撫でた後、ヤシの手を引いて行く。

ヤシとアンは手をつないで歩いている。路地の狭い世界を進む。

その後ろ姿を見てる女子2人は不満げ。その背後から「おい!」と肩を叩かれる。

びくつく2人。

<一方のヤシ達は路地を進んでいる>

アン「ヤシ、あんたももつと強くならなきゃ。 でなきゃ、」
「」
では生きていけないからね。

ヤシは沈黙、涙する。

アンは少し言い過ぎたと反省して、ヤシの頭をくしゃくしゃにする。

<6年前の出来事を思い出しているヤシ・・・>

神父が死んで絶望に打ちひしがれていた6歳のヤシは、一人教会にて泣いていた。

そこに12歳のアンが突然現れた。

「何で泣いてるの君？」

ヤシにアンは問いかけた。

目の前に居るこの女は誰か判らない。

判らないが、ヤシは、アンに抱きついた。

ヤシは泣き疲れて寝てしまっても、アンの手を握っていて放そうとはしない。

< 時間は現代にもどる >

泣き止んでるヤシはアンに手をつながれてる。

< 一方の青年 >

ぶんぶんとかし、大きな病院へと入る。

そこで診察を受けていて、レントゲンを見ながら説明を受けている。
海岸沿いを走ってる。

少し雪が降っている

< 一方の女子 A B >

古い小綺麗なアパートの一室で、正座している。

大柄の女が叫ぶ。

ストレス発散するように、叫ぶ。

「あまえら、判ってるのだうな。弱者から物を奪おうなんて、恥知
らずもいいところだ。」

大柄の女は A と B の前をウロウロして、足元を強く踏みつける。

A B は恐怖し目を逸らす。

タバコの煙が A B の顔に近くなる。

大柄の女はシャガミこみ、睨みつける。

「判ったか？」

AとBは返事をするが、声が届かない。

「聞こえない！」

高圧的な態度で屈服させられる様に、AとBは半べそかきながら返事をする。

そこへ、ドアをノックする音が聞こえる。

しつこく聞こえる。

大柄女「なんだよ！ うるせいな

<視点、アパートの外>

大柄の男、ジャンパーを厚く着た男が、やってくる。

ドアをノックする。

扉を開き女が出てくる。

<視点、ヤシとアン、教会にて>

ヤシは粉を鍋にれ、給油入れのポンプから水を流し込み。アンがこねる。小麦を水で溶かす作業をくり返してる。

小麦のメーカー名は「医龍」中国語表記であり、とても安い値段。

その教会の中に他に数人の子供達が、アンとヤシの様にしている。

そとでは焚き火があり、その上に、鍋に張った水。キャンプ風。

買い物から帰ってくる男の子、買い物袋には、調味料の類とミルクが入っている。

アンは中身を確認して、号令をかける。

皆がその場に集まり、調味料を一人ずつ、配っていく。

そして買い物袋を引っさげた、もう一人の男の子が声をかける。

「おねえちゃん。今日、買い物から帰る途中、仲間を見つけたのだけど」

そう言つて少年は教会の外を指を向ける。そこには6歳くらいの男の子が居る。隠れる様にしてる。

アンはつかつかと歩み寄り、笑顔で「ようこそ、我らの楽園へ」

そう言い、スーパーの袋から小さなキャンディーを取り出し分け与える。

皆がその場に集まり笑顔になる。それに合わせて笑顔になる

アンに手を引かれ、男の子は手を引かれ、教会に入っていく。

貧困ながらも明るい世界がそこにある。

<金持ち青年>

自宅へと帰り、門をくぐる。執事が丁寧に挨拶する。

大きな玄関を抜けて、食堂の前を横切る。食堂の部屋は閉まっている。

その向こうでは、大きなテーブルがあり、その向こうで、コックによる仕事が進んでいる。

青年エルは大きな廊下を進み部屋へと入る。

ベットで横になる。

沈黙の時間。エルは天井をポート見つめる。
天井は何もなく、壁に埋め込んだライトを凝視するだけ。

しばらくするとノックの音。ドア越しから「おぼっちゃん。もう直ぐ、夕食の準備が整いますので・・・」

その声を聞いて、降りていく。

食堂の扉にて執事が礼をする。

その先を見る青年。

テーブルの遥か遠の一番奥に父親が座っている。

横長テーブルの長い側には、母親が座っている。

母親に直面する様に妹が座っている。

父親の真正面に席が開いて入り口側の座に、腰掛けるエル。
。

エルの前に料理が運ばれる。

家族全員に料理が運ばれたところで、父親が祈り始める。

それに合わせる様に家族は祈り。

エルも祈る。

「神の恵みに感謝します」

そう言って、父親が食事を手につけると、皆食事を始める。

エルは食事をしていない。

「おい、どうしたんだエル」

父親の問いに母親もエルを見る

「もしかして食欲が無いのか？」

「いえ、少し学業の事で・・・」

パパ「そうか、だが、あんまり根をつめるなよ。お前は次期頭首なのだからな、

ママ「そうよ。ちょっとくらい勉強ができなくても、大丈夫よ。それよりも食べなさい。」

笑顔の両親

エルは笑顔になり、「はい、おかあさま。おとうさま」と、返事をして食べ始める。

父「ところでアネロ。今日は学校でどうだった？」

妹あねろ「うーんとね。うんとーん。たのしかったああ

あねろは、7歳、小学校に入学したばかり、たどたどしく話す。

家族の笑顔が食卓を囲んでいる。

< 食事も終わり部屋でくつろぐエル >
こみ上げる不快感に襲われて、トイレに駆け込み吐く。
口を拭くと血の色が付いている。

< 一方大柄の女は部屋で気持ち良さそうにミッドナイトオールして
る >

ベットのそばにはコップと注射器があり、男とエキサイト。
アパートにあえぎ声のみが響き渡る。

誰も居ない。

女子AとBは、夕暮れ時、コンビニの前で弁当をほうばる
その際、中年のおっさんに声をかけられ、白い紙袋を渡す。

おじさんは人目を気にする様に、紙袋を抱えて帰る
帰り際、紙袋の中身を調べ白い粉を注射器を確認。顔が笑顔に変わ
る。

< 翌日、深夜3時 >
教会の中にて、寒さを防ぐには万全とはいえない薄いふとんに皆で
寄り添って寝ている。
そこにアンの姿は無い。

教会の扉をゆっくりと閉めて、外に出る。
路地裏を歩き、公共的な墓場へと辿りつく。
そこで神父の名の書かれた墓地で祈りを捧げている。
ごめんなさい。と呟いたアンは一筋の涙を落とす

その後、仕事場として、新聞社へと向かう。

さびれた新聞社で、いつ倒産してもおかしくない。

職員あら名程で、社長に声をかけられる。

「やあ、おはよう。今日もごくろうさん。

「はい、社長、おあようございます。

「もう、やめてよ。社長じゃ恥ずかしいよ、しゃくでいいよ。

困惑するアン

「でも・・・

「だから、いつも言ってるでしょ。この不景気でマトモな給料が支払えないのに、アンは人一倍頑張ってるって、頭が上がらないのは私の方なんだよ。

「そうそう。

もう一人の中年男性が社長にあいずちを打つ。

社長「ほら、副社長のふくちゃーも言ってるんだから、気にしない気にしない。

そこに2メートルくらいの美女が現れ、3人を見下ろす。

「無駄口を叩く暇があるなら、仕事してください。

3人は動けずに固まる。

2メートルはデスクに戻りチラシの仕分けをする。

「さあ、しごとしごと」「しゃーとふくちゃーはデスクに戻り、新聞の仕分けを始める。

それに続き、アンも仕事を始める。

4人は仕事が終わると、バイクに乗り込む。
5倍速のスピードで配り始める（映像的に・・・）

配る場所は人口密集地のオフィス街。

一般家庭には配らない。

配るのは主に、自営業者、サラリーマンの集まる施設ばかり、その中で、アンはエルの豪邸にも立ち寄り、門番に渡す。

仕事が終わわり、その日の給料を貰う。

10ドルと55セントの硬貨を受け取る。

その後、徒歩で教会へと帰り7時、皆がアンを迎えてる。

「お疲れ様、お姉ちゃん」

皆が口をそれて言う。

昨日、拾った子供も真似をする。

<青年エル視点>

早朝6時エルは門番に声をかける。

「今日は、早いですね、ぼっちゃん。こんなに早く、いつたいどいへ？」

「ちょっと高速道をぶつとばしたく

「また、何を言ってるん・・・

沈黙する門番。

いつもと様子の違う門番に疑問を感じたエルは問いかける。

「じょーくだよ？」

ほっとする門番。

「今日は、早い内に学校行ってレポートしないといけないのだよ。」

「そうですか、そうですか。」

納得する門番。

「ところで、それ新聞？」

「え、あ、そうですか。」

「何か、良いこと書いてあった？」

「え？ 良いことですが？ ……得には…。」

「そうか…、まあいい、とにかく行くから。」

「はい、いつてらっしゃいませ。」

エルは門を出て行く。

アンとエルをバイクですれ違う。

エルは籠に一杯つまえた新聞をちらっと見た。

都心を抜け、山を登り城みたいな学校に到着。
バイクを山の中に隠して登校。

エルは図書室で医学に関する書物を調べている。
時が流れる。時計の針は回転する。

授業へと向かう。

授業を聞く。
窓のそとをなんとなく見る。

社会科の授業をしている。先生は語る
第5次オイルショックと食糧危機で30年前に時代は大きく変化してたこと。

世界の競争が激化して、勝ち組と負け組みが別われた。金持ちと貧乏が2極文化して、中間が少なくなった。この予測は既に100年も前からされていたのに、各国は互いに歩み寄れず、なすすべなく、なにもできなくなった。

資源の少なさの問題で政治では民主主義制度を推進されず、すべては国民の民任せられたこと。

この学園に通える者は幸福であり、社会の勝ち組だといわれる。弱者の為に何とかすべきだと熱弁をふるう教師。

しかし、青年含めて誰も聞いていない。

生徒が規律して先生に言う。

A「先生、きもちわるいです」

B「そうです。綺麗ごとは止めてください」

C「僕らは世界のライバルとたちと戦わなきゃならないのです。資源が無いのだから仕方ありません。少なくとも僕は貧乏人を見捨てます。そうしなければ、いずれ、僕らの資源が奪われてしまいます。」

先生は『切腹!』と叫びながら、窓の外へジャンプする。

<ベットインしてる薬常用者>

女子AとBは、隣の部屋でスヤスヤと寝ている。

男がベットから降りて、タバコに火をつける。

「あたしにもちょうだい。」

男はタバコとライターを放り投げて渡す。

女は、隣のへやのドアを開けて、怒鳴り散らす。

「おい、早く起きて、

女子二人は、冷蔵庫から食材を取り出し、ご飯を作る。

それを食べる大人の二人

それを見る2人に「あ、もういいから」

その言葉を確認すると、2人の女子は手を繋いで外へ出かける。

コンビにまで、きたら、鬱憤を晴らす様に愚痴る

A「あーもう、むかつく、あのクソババア。

B「だーね、殺してやりたいね。

A「いつも食べるの昼なのに、なんで、今日にかぎって早く・・・

B「ほんとほんと、

A「あゝかつたるいわゝあたしらも覺せい劑やりたいわゝ

B「そうだねゝ

お日様がA Bに、にっこり微笑む

そこに携帯から電話が掛かる。

Aが話し終えて切る。

「どうやら新規のお客さんさんらしい。いくよ」

「えゝ。もう、めんどくさいゝ

2人の女子がコンビニでしゃがみ込んで、パンツが丸見えの所、変なおじさんが声をかけてきた。

「ねえ、君たち。よかったら、お兄ちゃんにパンツを売ってくれな
いかな。

きもいゝ

A t o Bは躊躇なく、自称お兄ちゃん叔父さんを蔑みの眼差しを向
ける。

しかし、修羅場を生きているこの女児、柔軟に対応し、売買契約成
立。

2人はパンツを脱ごうとスカートの中に手を伸ばしたそのとき

自称お兄ちゃん叔父さんから待ったの声が掛かった。

自称お兄ちゃん叔父さんは、自ら脱がしたいと申し出た。手を煩わせるのは忍びないらしい。

これには女兒さんたちも自称お兄ちゃん叔父さんの足元を見るしかない。

更に、追加の金を要求した。

そうしてまたも売買契約成立、自称お兄ちゃん叔父さんは、喜んで家路へと帰りました。

その光景を見ていた警察は、自称お兄ちゃん叔父さんを逮捕し手柄を上げた。

女子児童は警察の事情聴取に付き合わされるハメになった。

親御さん電話を駆けるとかで、今、麻薬でラリッテる家族の元を電話駆けた。

<ラリッテルばあと男。>

「え？ なに！！ 警察！？

電話に出ているババアに、男が問いかける。

電話の声にうなずきながらも、男はそわそわ、女も家中をうろつろ。

電話を切った後、真相がわかり、世界の終わりから開放された様に、

その場にうずくまった。

<警察にて>

ババアが善人らしく、子供たちの手を繋ぎ。作り笑顔している。警察はのんきにも、『幸せなご家庭ですね』と口走る。その言葉に、AtOBの眉間にシワがよる。

<麻薬売買を目撃するアン>

ある日、アンはスーパーで買い物した帰り、大通りを歩いていた、アンは自称お兄ちゃん叔父さんに声をかけられる。

「宜しければ、パンツを売っていただけませんか？」

アンの右ストレートが自称お兄ちゃん叔父さんに炸裂する。

倒れたそいつのポケットから、女子児童のパンツがこぼれ落ちた。

軽蔑の眼差しで、蔑み、ノックアウトした自称お兄ちゃん叔父さんを放置して歩いていた。

大通りを進んでいるとコンビニの前にて、A t o B が居た。

アンの脳裏に自称お兄ちゃん叔父さんの記憶が蘇る。

それを消す様に頭をブンブン振る。

しかし、イメージはアンの脳内を侵食。A t o B が自称お兄ちゃん叔父さんと売買契約を成立させたのではないかと疑い、2人に詰め寄ろうと、近づいた。

と、そこへA t o B に話しかける中年男が現れる。男はA t o B がから、紙袋を貰うけた。

おじさんは大通りを、アンの方向へと歩いてきた。

アンはすれ違い。不思議そうな顔をする。

その問いをA t o B にぶつけてみる。

A t o B は、嘘を話す

A「え？ 何もあげてないよ。あれあ叔父さんが私たちに肉マンを奢ってくれるっているから、断ったんだよ

B「そうそう。知らない叔父さんは、名に考えてるか判らないし、怖いよね〜

「「ね〜」」

2人は笑顔で顔を合わせる。

この光景に安心したアンは大通りを進むが。しかし、違和感が残る。

自分の目には女子たちのポケットから紙袋が取り出された気がしたからだ。

<青年エル視点>

病院から出てくる

思い出していた。

病院での話を思い出し、血を吐いた事を思い出し、医学書読んでもネット調べても先が無いのを自覚していた。

親に言わなければ成らないのだが、踏ん切りがつかない。

先生には家族に真実を告げない様を買収していたから、ばれずに済んでいる。

医者からは家族に真実を話す様に説得をうけたが、それでも意思は固かった。

なにか、助かる方法を見つけてからでも、告知は遅くないと主張したが、それでも幾ら調べても方法は無かった。

バイクにまたがり発進さえようと、するが手が止まるエル空を見上げてため息つくところに、

自称お兄ちゃん叔父さんが救急車でかつぎこまれる。

それを見て、また、ため息を漏らすエル。

<警察視点>

自称お兄ちゃん叔父さんは病院にて、殴られた経緯を伝える。

何もしてないのにいきなり殴られたと言いはるが、証拠のパンツを

はいているし、証拠パンツが肌の引き出しから出てくる。
あわてふためき、しほりだした言い訳は
「私は店で自分で買ったパンツなので法律的に何も問題ない！」

ええ、それは問題ありませんけど、前科あります。

警察はその事実をちらつかせて、パンツのDNA鑑定を求めてきた。
その求めに対して顔面蒼白になった自称お兄ちゃん叔父さんは窓から身を投げた。

<葬式>

自称お兄ちゃん叔父さんの葬式である。

棺に入れられ家族が悲しむ中に、家族はエル学校の先生の遺影を手に持っている。

エルの学校の先生と自称お兄ちゃん叔父さんは、兄弟だった。
家族は兄弟そろって早くに死んだことを嘆き悲しんでいた。

<アン視点>

アンは神父の墓の備えられた花を交換していた。

そこに、葬式中の一家ありけり。

土葬される様で、棺が土に入れられる。

アンはその光景をみて「残された家族に、神のご加護がありますように、アーメン」

と、一言呟き、その場を後にする。

教会にて、勉強をしている。

学が無いとこの先困るからと新聞社の、しゃーが アンに教材をくれたのだ。

アンが勉強中は子供たちは静かにしている。

しかし、子供のたちの騒ぎ声が聞こえる。

気になって集中を解いたアンは教会には見回すが子供達亜は居なかった。

外に出てみると子供たちが居て、誰か取り囲んでいる。

子供たちはエルを取り囲んでいた。

<エル視点>

スーパーにてレジ打ちの練習中のお兄さんが居る・

レジをうちの練習をしていると、お客さんが間違えて、会計に来た。『練習中』のプレートに気付いていない。

籠には大量のお菓子がある。チューンガムはチョコレート、スナック菓子が、てんこ盛り。

エルは自分の間違いに気付き、そのまま別の列へと向かう。

その光景を不思議そうに見るレジ打ち。

エルはスーパーの駐車場に置いたバイクへと向かう。

バイクには子供たちが集まっている。

子供たちはバイクに夢中で気をとられ、バイクの主が突然、現れたのに驚き、逃げる様にバイクから離れる。

エルは、その場でお菓子の封を開けて食べ始める。

それを羨ましそう見る子供たち。

教会の子供である。

「お兄さん凄いな。これ全部、一人で食べるの？」

うなずくエルは子供にも目もくれず食べ続ける。

どうしてこんなに食べるの？

「ん？ これには理由があつてね。実はオレお菓子とか食べた事ないんだ。健康に悪いって親に教えられてから、怖くて食べられなくてね。」

「で？おいしいの？」

沈黙するエル

(コックが作るものと比べて大差ないかも)

「どうしたの？」

「いや、別に・・・」

そこに昔、登場した教会でキャンディーを貰った幼児6歳が声をかける。

「そんなに食べたいなら、教会にくるといいよ」

エルは疑問する。

幼児は「教会に行くとな、お姉ちゃんがキャンディーをくれるんだよ。だから、お菓子が食べなくなったら、くるといいよ」

幼児の言葉に、ますます疑問の表情を浮かべるエル。

「教会の場所、教えてあげるから、いこうよ。」

幼児はエルの手を引っ張る

エルは幼児につれられ歩いた。

長い道のり。「どこまで行くんだ？」

「もうちょっと」

ため息するエル。

それをよそにバイクを楽しそうに触る子供たち。

まだか???

「もうちょっと」

ため息するエル。

それをよそにバイクについてしつこく聞く子供たち

どこまでも歩き続ける

<教会にて>

教会に付いた時、エルは疲れ果て、その場に蹲すまっていた。

子供たちはエルの持っていたお菓子お菓子に群むがって騒いでいる。

「おわーすげー。これ、食べていいのほんとに？」

うなずくエル

でも、「ほんとうにほんとうに食べていいの？」

疲れて返事できないので、うなづくエル

子供たちは思い思いに取るうとする。

そこに、アンが現れる。

「あなたは、一体・・・

ぜいぜい、ハアハアのえるの光景に
意味不明で沈黙する。

「えと？ よく判らないですが、この子供たちのお菓子は貴方が？

ぜいぜい、ハアハア答えられないエル。

<教会にて>

お茶をすすするエル

もてなしをされている。

一息ついたところで、

「子供たちに、聞いたのですけど、教会に來ると、おねちゃんとい
う者がお菓子をくれるというのは本当ですか？

「え???

(やばい。この人何を言っているのか訳が判らない。お菓子を持っ
てきたのになんで、お菓子が欲しいの?)
沈黙するアン。

「どうかしましたか？

「いいえ、なんでもありません。

「ところで、今日はどうして・・・

「ですから、教会に來ると、おねちゃんという者がお菓子をくれるその理由です

（えー！ もう、わからない。何がなんだか判らない。そつだ、話題を逸らそう

「こ、この教会は、聖母マリアを信仰するもので、キリストの教えを・・・

（なんだ？ こいつは？ オレの言ってる意味が理解できないのか？？。。。。まあいいや、そもそも子供のたわ言だ。会話に辻褄が合わなくて当然だ。さて、帰ろう。流されたとはいえ、あんなに歩かされるとは思わなかった。面倒に巻き込まれる前に、さつさと家に帰ろう。）

「あ、その話は結構ですので、私は帰らせてもらいます。

エルは立ち去り、ドアから出ようとしたとき、

「お兄ちゃん、お菓子もらえた？

根本原因がエルに話しかけた

エルの顔は変わらず。

「うそつきは泥棒の始まりだぞ。

「う、うそじゃにや

「いや、確認したけど、そんな事実はなかった。

「ほんとだよ

「うそだ

「ほんと、

ほんと嘘のループ

「うわーーーーーん

泣き出した子供

おろおろするエル

皆が集まる。

「ちょっと、一体、あなたどういつつもりですか！
アンが問いかける。
おろおろするエル

<教会にて>

「事情は判りました。そういうことでしたか・・・ですが大人げないじゃないですか。子供相手にムキきになって・・・」

「ムキ？ ムキとは、感情的になり我を忘れるというムキのことですか？」

立ち上がるエル

「私は至って、まともです。先ほどの私は感情的でなく、子供の間違いを教える。いわばしつけるために言ったのです。感情的とは、本意にも泣かさせてしまった後におろおろした態度に対して感情的と言うのです」

アンは、いきなりの主張にたじろぐ。

エル「あ、あと、今の私は感情的です。理由は貴方が私よりもどう見ても長く生きてる癖に、年下の思いに鈍感だからです。大人なら子供の気持ちを察して当然でしょう。」

アン（あ~~~~、なんだコイツ。いつてる事むちゃくちゃだよ。

子供の気持ちを察するって・・・さつき子供泣かした癖に自分の事棚にあげてるし〜

エル「あ~~~~、なんだコイツ。いつてる事むちゃくちゃだよ。

子供の気持ちを察するって、さつき子供泣かした癖に自分の事棚にあげてるし〜

エル「いま、そんな風に私の事を思ったでしょう。表情を見れば判ります。とても侵害です。私は、先ほど、しつける為にだと言った

でしょう。それをまるで見下すようにして。。。貴方は人に責任を擦り付けて、大人として恥ずかしくないのですか？

アン（あーーーーー！ なんかめんどくさい、

エルの表情が悲しい表情になる。

「もう、帰ります。

エルは感情がドリフトしていくように、アンに背を向ける。

教会のドアに向かう。子供たちはエルを避ける様に道をあける。

エルは去る。バイクを手押しで路地へと消えていく。

「お、お兄ちゃん、お菓子ありがとね」

子供たちは手を振っていた。

< AtOBコンビニで売買している >

麻薬の売買しているAtOBが居る。その大通りをエルがバイクで突き抜けて行く。

買い手と会話するA。それを見ているB

A「こんどから取引場所が変わりますので注意してください。取引場所と方法は折り返しこちらから電話致しますので、お待ちください。

買い手「いつまで、待てばいいの？」

A「えと、遅くても一瞬間くらいで、いつもど通りの取引が可能になると思います。

BはAの会話を見て思い出していた。

〈回想シーン〉

アパートにてAとBがババアから、話を聞いている。

A「売買の場所を変えるのですか？」

ババア「ああ、そうだ。最近、広くやりすぎて、バレそうになっている。前に、知ってる奴に売買しているところ見られたと言っただろう。それに、最近、俺たち意外にも薬をさばいてるやつが、いるらしくてな。しかもそいつら、ちょっと危なくてな。同業者がパチでヤラレチマツテル。

A「殺される？」

ばばあ「ああ、そうだ。裏で大きな組織が動いてるみたいで、俺たちの客を奪うツモリみたいなんだ。だから、場所をもっと都会から遠ざける

A「引つ越？」

「ばばあ「めんどろだが、仕方が無い。お前たちも殺されたく無いだろう。だから今から、支度するんだよ。とりあえず、お前たちは、今の客をさばいて来い。終わったら直ぐに帰って来るだぞ。こつちも仕事が山済みだからな。」

Bは回想から戻る。

Aの売買をしっかりと見る。

売買が終わって一段落の後、

B「ねえ、私たちがいつか殺されちゃうのかな・・・

A「・・・わかんない。

B「ねえ、逃げない??

A「逃げるってどこにさ、逃げたら絶対あいつらに殺される。

B「ヤシの居る教会に行かない？」

A「はあ？　なんであんな奴が居るところに！

B「でも・・・

A「今さらだよ。どの面^つ下^びげて行けいってんだ？　馬鹿にされてコキ使われるのが落ちさ！

Bは反論できず黙った。

<夜、誰も通らない路地で明かりもない場所にて>
懐中電灯を持った男が居る。

そこに、もう一人の男が現れる。
麻薬の取引をしている。

その路地の出入り口を囲む様に、闇に紛れた男が7人居る。
7人は路地から出てきた2人の男を一齐に捕まえた。

売り手も買い手も車の中に押し込まれて連れ去られる。

<コンクリートの壁に覆われたところ>

男2人は手錠をかけられ、一人に涙を流して命乞いをしている。
構わず暴行を受ける

「だから、薬を仕入れた！アジとはどこだ！」

「私は知りません。買っていたただけなんです。
命乞いをしている人は主張する。
だがボコボコにされる。」

それを苦痛そうに見てる売人。

でも言えない。なぜなら・・・

時間は刻々と流れ。コンクリートの世界に光が差し込み明るくなる。朝がきた。

2人はそのまま、息絶えた。

<教会にて>

深夜、誰かが、教会の扉を叩いている。

何事かとアンは出ると女子Bが涙を流していた。

事情を聞くと、深夜トイレにBが入っている間にマフユアが玄関から進入してきた。恐怖を感じて隙を見て一人で逃げ出た。

携帯で警察に助けを求めたが信じて貰えない。半信半疑で警察が駆けつけたときには、もう誰も居なくて、アパートはもぬけの空だったらしい。

女子Bは自分の罪を神に向かって懺悔した。

ヤシを苛めた事も懺悔し、覚せい剤の売買についても懺悔した。育てたくれた親たちを死ねばいいと思つた事を懺悔した。

「だからAを返してくれと・・・」神に願つた。

<トイレにて>

エルは吐血中

しんどそうに、その場にまへくす蹲る。

豪邸のトイレだから、少し広い。

警察のサイレンが聞こえる。
空にサイレンが成る。

教会のアンの顔が脳裏を過ぎる。

(なんで、こんなときに思い出すのかな・・・)

よっぽど腹が立ったのかなオレ？

なんで、こんなに腹が立つんだらうか・・・

エルは突然、笑顔になる。

バイクに乗り込み発進。

門番を無視し、そのまま町をつつきり。

教会に到着。

教会ではA子ちゃん誘拐で大変な空気。

そのなかを ずばずばと歩いていき、アンの前にて

「オレはアンタが好きなんだ」

は？

という顔をしたのは言うまでも無い。

皆がそう。

「おい、男が女に告白してるのだぞ。そのリアクションは一体どう
いう訳なんだ？テレビでは・・・」

エルの思つべた一な展開が脳内を駆け巡る。

<アンによるAちゃん誘拐事件の説明終了>

える「ふーん よし判った。協力しよう。」

あん「協力って??」

える「判らん。好きな人が困ってるのだから協力するのは当然だ。」

このシーン作者でも、どう説明していいか判らない空気が流れた

<監禁されている。女子A、ババアと連れ>

先に死んだ者が居たばしょ。コンクリートの壁。小さな窓が手の届かないところある。

地面には前に死んだ者の血痕が染みとして残っている。

3人とも無傷である。

サングラスを駆けた男は外す。

「そうか、お前たちは家族ぐるみでしてたのか。へえ。仕入先の居場所も確認できたようだし、お前ら、生かしておいてもいいよ。」

3人は笑顔になる。

「その代わり……オレらの仕事の手伝いして貰うけど良いか？」

ババアと連れは顔見合わせて、うなづく。助かりたい一心。

「僕たちも鬼じゃないんだよね。人手は欲しい。それに今まで同じくらいの収入は保証しよう。」

タバコをすい始めるサングラス男。

ババアの顔に煙を吹きかけ、連れに吹きかける。

「だから僕たちのこと内緒だよ。」

<エルは屋敷でベットの中にいた>
今日の出来ごとを振り返る

（回想シーン）

「ふーん よし判った。協力しよう。」

アン「協力って??」

「判らん。好きな人が困ってるのだから協力するのは当然だ。」

と、言ったのち、直ぐに家に帰って行く、

おいおい

回想終わり

エルは天井を見上げて考え事をしながら、寝た。

<教会にて>

アンたちは、B子を慰めてる。

茶ーを出す

Bの涙の痕跡を見るアン

「あなたは。しばらく、ここに居なさい。私が何とかするから。

「なんとかって、どうやって・・・」

「大丈夫。神を信じるの。きっと奇跡を起こしてくれる。

ぼろぼろ十字架を見つめるアン。
そのアンを見るB

<明け方、4時、Bは泣きつかれて寝てる。>
他の子供達も寝ていて、起きてるのはヤシ。

「どこに行くの、お姉ちゃん」

「あ、えと、配達の仕事だよ

「Bちゃんの、ことは、やっぱり、どうにもならないのかな？」

「大丈夫だって、ヤシも寝なさい。ここでの生活を新しい家族に教えないといけないのだからね。

「うん。

アンは出て行く。

<新聞社にて>

「しゃー」「え？ そんなことがあったの？」

ふくしゃー」マジ

2m「こわー

シャー」アンちゃんの悩みなら協力してあげたいけど、どうにもこうにも……

2m「あ！

一同、2mの顔を見上げる。

それを見た、ふくしゃーも「あ！

一同、ふくしゃーを見る

シャー」あ！

<時間は飛び>

机の目線で、一同が眺めている様子

<マフィアのサングラス男はサングラスを外した状態でモーニング飯を食う>

ゆっありして、窓からプールが見える。

コーヒーを飲みながら、なんときなしに、新聞を見る

コーヒーを噴出す。

新聞の内容、一面でかかと、

「新聞を契約の皆さんにお願いがあります。今日、私たちの大切な人が何者かに誘拐されてしまいました。誘拐されたのは女12歳、男40歳、女32歳の3名です。新聞の契約者の中にもし犯人が居るのあら、どうか警察に自主してください。でなければ永遠と私たちは主張します。」

犯人は笑った。

馬鹿かと思ってる。

笑いが止まらない。

<新聞社にて>

しゃー「やるだけはやった。後は運に任せるしかない。」

ふくやー「そうですね。犯人が僕たちの本当の意図に気付かなければ良いですが。・・・

2m「そうですね・・・

<エルは朝、新聞を手にとって見ている>

あ！

閃くエル

そして携帯を取り出し、どこかへと電話をかける。

「新聞読みました。犯人を誘き出す作戦ですね。」

シャー「あ、気付きましたか、あなただけですよ。今のところ気づいたのは。」

「だったら、なおさらいけそうですね。」

シャー「そうです。でも、なにぶん私たちは人手不足でお金もないのです。

「では私が協力しましょう。

シャー「ええ??? ほんとうですか? なんと天の導き、貴方は神様ですか?

「神様? 神は貴方でしょう

<マフィア視点>

マフィアは毎日の様に新聞を見て笑った。

同じ事がいつも書かれて、発行した者の馬鹿さ加減を笑ってる

<戦略の行使>

10万件の新聞を発行しているこの新聞社は毎日、新聞の一面に『自首してください』を書き続けた。

日本人口1000人あたり一人が1億円以上の貯金を持つ裕福層である。

必然的に、この裕福層の新聞解約は一般人よりも出遅れ気味になる。毎日、同じ記事を読ませられる読者は心配して新聞社に連絡をしたり、あるいは無駄な記事を読みたくないが為に解約をしていく。マフィアの幹部も裕福層である事が期待される。新聞を5日掲載した段階で契約者1万人を割り、その後も減少を続け1ヶ月程で契約者は10000となった。

この10000の住所に対して延べ1万人の私立探偵を派遣し、エル

は1000億円の資財をつぎ込んだ。

父親に『1000億も使ってゴメンなさい』の遺書を残したエルにより、探偵の努力は身を結んだ。

事件から3ヶ月目にしてマフィアの悪事の証拠をゲット。警察に証拠物として提示し、踏み込みタイホーした。逮捕直後は、おりしも雪がコンコンと振る夜でクリスマススイブだった。めでたし。

<エルが居なくなった世界にて>

確かにマフィアはやっつけた。しかし、覚せい剤が無くなった訳ではない。

彼らが支配していた地域には他所の誰かが支配する訳で、元の世界に戻るだけである。

教会ではいつもの日常が戻っていた。

助かった女子Aの親御さんは逮捕され、行き場の無い女子Aもやむなく加わった。

教会での新たな生活の日々が始まった。

A子「え〜なにこの汚い便所

「え〜なに、手で小麦粉こねるの。」

「え〜〜こんな地べたに寝るの

A子は不満ばかり。

それはB子も同じ。

アンとヤシ達は自給自足の為、野菜も作る。それをA t o Bは手伝わされる。

思わずA t o Bは、息抜きに、なつかしのコンビニに、たむろしていた。

そこに中年の叔父さんが現れた。

「君たち、あれ、もう売ってくれないの？」

A「叔父さんゴメンね。もう、あたしたち足を洗ったんだ。

Aは手で注射器を押す仕草をした。

仕草を見た中年は

「それ、どういう意味？ お兄ちゃんが欲しいのは、君たちの履いてるパンツだよ。

あば—————ん

T H E N D

つじつまが合わない話2

<設定変え。もしも、この町にギャングが居たとして>

ギャングたちは使われなくなった工場に居た。

FF7の最初に出てくる魔航路の様な、あるいはデュララの様な倉庫の様な大きな建物である。

そこでギャング達は集会をしていた。

会議の不陰気は、デュララの青組みみたいな危険な感じ

リーダー「なあ、そろそろオレたちは6番街の方にも進出してもいいじゃないかと思う。

手下「確かにあっちの方は、まだ、手をつけてませんね。

リーダー「皆どう思う？」

リーダー格の幹部10人の男と3人の女たちは・・・
乗り気。男一名やるきない態度

悪A「あれ？ メロおまえ、やる気ないの？

メロ「いやそうじゃないけど・・・結構、配下を束ねるのって面倒なんだよね・・・今の数がちょうどいいかなって

「あたしは彼が言うなら。

メロの肩に抱きつく

リーダー「問題は無い様だな。じゃあ、行くぞお前たち！

リーダーは威勢よく号令をかけた。

それにより、1000人の手下達がリーダーの号令に熱狂した。工場内が歓喜に包まれた。

<教会にて>

ある日の事、突然、ギャング3名やってくる。。

A「お、こんな所に教会があるぜ」

B「あ、ほんと

C「胸糞、悪いから荒らしていこうぜ

教会の門の前でドアを勢い良く。。

A「たのお」

B「たのも」

C「たのも」

「神にお祈りを捧げたいのじゃ」

昼間、バットを持った来客に子供達は怯える。

幼児6歳は警戒心無く出迎える。

「邪魔！」と言わんばかりに押し飛ばされる。

A「おお〜結構いい場所じゃないかよ〜、暗い感じといい。ちょっと狭くて臭いけど、集会のスペア場所としていいんじゃないの？

B「うんうん。」

C「おや？　ひとり可愛い子が居るよ」

Cがアンを指差す。

3人はアンを取り囲む。
髪を触る。

A「おお、金髪のサラサラヘアだよ。」

B「エロいエロい」

C「なんか合格ラインじゃねえ？」

抵抗しようとするアン。しかしCに腕をつかまれる。

子供たちは怯えている。

だが、幼児6歳は違った。

果敢にCに立ち向かっていった。

「あー！ー！」

アン「来ちゃ駄目！」

6歳は頭を押さえつけられる。

C「餓鬼が……。痛い思いせんと俺らの怖さが判らない様だな。」

アン「待って！　言う事は何でも聞くから、子供たちには手を出さ

ないで。

C「あ、そう？ 物分りがいい人で良かった。でも、うざいからこいつ一発殴る。」

6歳は殴られ、泣き出して、うずくまってしまう。

「じゃあ来い。俺らのアジトで、たっぷりと楽しもうぜ」
舌なめずりのでアンを見ることに読者が嫌悪する。

アンは3人連れられて行く。開きっぱなしのドアから出て行くとしたその時、

ヤシが教会の奥の部屋にある斧を持ち、背後から忍び寄ろうとする。

アンはそれに気づき、大声で「ヤシ駄目！！」と一括する。

アンの怒鳴り声に、萎縮してしまうヤシ。

ギャング達は、その声に気づき振り返る。

A「えらいえらい。俺たちに歯向かったら、1000人を超える仲間を引き連れて仕返しに来るからな。リーダーさんは頭がいいね」

悔しい顔のアン。

「じゃあ、行こうか。」

4人はドアを出ようとする。

「あ、そうだった。

Aは振り返る。

「もし、俺らの後つけようとしたり、警察にちくつたら、この女の命は無いからな。皆さん、ちゃんと覚えておく様に。」

子供達は連れて行かれるアンをただ、くやし涙をしながら、見る事
しかできない。

<アジトにて>

アパートに一室に連れ込まれる。

と、そこにリーダーがいる。

先頭をきつて部屋に入ったAは驚きを隠せない。

A「ヘッド！ どうしてここに??!!」

頭はAをにらみ付ける。

頭の女「あんた馬鹿？ 歩きつかれたから、ちょっと休憩してるの。

鍵は、ほら、仲間に頼んでこじ開けたの。

頭はため息をする。

頭の女「そんな事より、その女何？」

A、B、Cは、すっかり忘れていた様に、女を見た。

頭は皆に合わせる様に後から、ゆっくり顔を上げ、女の顔を見る。

< Aが教会でのいきさつを説明した後 >

頭立ち上がる「惚れた！」と一言つぶやき、アンの手を取る。
。アンは部屋に連れて行かれる。
頭の女は不満そう。

部屋に連れ込まれ、ベットに押し倒され、男は服を脱いぎ、抱きつ
いた。

< 教会にて >

ヤシが心配そうにしている。アンの勤め先の新聞社の変人3人もい
て。悩んでんてる。
そこに、アンが帰ってくる。

皆、驚く。帰還を喜ぶ。アンの後ろには頭と悪ABCが居る
子供達が恐怖する。『犯人はコイツ』という意思表示に、新聞社の
3人は子供達を守ろうとする。

アン「皆、大丈夫だから落ち着いて

「お前ら!!」

頭は大声で怒鳴った。

ABCは子供達の前で謝罪をしている。

「すみませんでした」m() () mする

どういふ事か皆に説明を求められるアンは過去を回想した。

（回想シーン）

頭立ち上がる「惚れた！」と一言つぶやき、アンの手を取る。。

アンは部屋に連れて行かれる。
頭の女Aは、不満そう。

部屋に連れ込まれ、ベットに押し倒され、男は服を脱いぎ、抱きついた。

この瞬間、アンの脳裏に『自称お兄ちゃん叔父さん』の記憶が蘇る。

アンは『自称お兄ちゃん叔父さん』をぶん殴った。

気付くと、頭が殴られて飛んできた。

アンは、不本意で殴った為に、「ごめんなさい」と呟く。

これから起きる仕返しに恐怖する

口から血を流す頭は手で拭う。血を見る。

「や、やるじゃねえか！

え？

「女に殴られるなんて初めてだ、ますます、気に入ったぜ。

ええ???

「お前の事は一生大事にする。だから、オレと抱き合ってくれ

え——————!!!

「じゃ、じゃあ……したくない……

恐る恐るに発言したアン

「なぜだ！ テツペンの地位に居る俺が愛を注ぐと言っているだぞ。

「テツペン???

「そつだ。オレと一緒に居ればどんな願いだって叶う。宝石もバツクも好きなだけ買ってやれるのだぞ。

「そんな者には興味ない

「なんだって!??

「私はそんな物に興味は無い。

「じゃあ、何が欲しいんだ

「何も要らない。

「はああ!??

驚きを隠せない。カルチャーショックを受けてる様子

「判らん「お前、何を言ってるのかサツパリ判らん、

「私も貴方が判りません。ですが、はっきり言います。私は貴方に興味ないし、宝石やバツクにも興味ありません。

「じゃあ、何に興味あるのだ?

考えあぐねたアンは一言

「子供達・・・」

「子供????」

「うん。」

「なんで、子供なんか？」

「なんでって・・・子供は可愛いとか思わないの？」

「思わない。というより、ウザイだけだ。やかましいし。」

「私は、それがいいの」

頭は困惑する。考えあぐねた挙句。

「じゃあ、オレが子供に優しくすれば、いい・・・てことか？」

沈黙するアン

「じゃあ、やさしくするから、

頭はアンに抱きつこうとする。

「やめて・・・」

拒むアン。嫌悪感の顔してる

「なんでだよ。やさしくするって約束したじゃないか。」

「貴方は信用できない。」

「信用？」

「暴力で人をねじ伏せて、人をいいように使つて。裏切りも平気でするんでしよう。」

逆上する頭、我を失う。必死で説得する。

「オレはそんな事しねえ！ オレは今まで、生きてきて嘘なんてついた事一度もねえ！！ 約束破りなんて、人として最低な行為、オレは死んでやらねえ！」

「じゃあ、証拠見せてよ。」

「証拠？」

「そう。謝るの。貴方たちの仲間は私の子供達を殴り、恐怖させたのだから責任をとつて。」

「恐怖・・・」

「そう、だから、責任を

「恐怖つて何？」

「は??？」

「今まで抱いた女に何回か言われたんだ。貴方は恐怖を知らないから、私の事を躊躇無く殴れるのよ。つて・・・。その時も恐怖の意味が判らなくて、聞いたのだけで、答えが判らない。恐怖つて、死ぬのが怖いとか食べるものが無くて死ぬかもしれないとか、そういう

うのだろう。殴ると恐怖にどういつ繋がりがあのか判らないんだ。

「そう・・・」

「だから教えてくれよ。頭の中が、もやもやしてるんだ。皆が知っていて俺が知らない事。オレだけ知らないなんて気分が悪い、

アンは沈黙したのち呟くように言う

「あなたは、もしかすると。。。」

「え？ 何？

聞き取れない。

沈黙した後アンははっきり言う

「恐怖については教えられない。でも、貴方が恐怖を理解できるまで付き合う。そうすればいずれ、恐怖を知る事ができる。」

「本当か？」

「え、本当よ。」

「嘘じゃない・・・よな

「私は、今まで嘘をついた事はありません。嘘は最低の行為だと思っ
つていますから・・・」

「そうか。お前もそう思うか、

「だから私は貴方を絶対に裏切らない。」

頭は沈黙の後

「判った。信じよう。謝って謝罪すれば良いのだな。」

「それだけじゃ駄目。責任もとって、」

「子供をやさしくすればいい・・・のか。」

「ええ、」

「そうすれば、オレが嘘を付かないと信じてくれるか??」

「ええ、」

「信じてくれたら、抱いても構わないのだよな。」

「ええ、勿論です。それができるなら、間違いなく貴方は最高の男だと認めざる負えません。」

<回想終わり、現実へ>

アン、「という訳で、この人は、貴方達に謝罪して、責任を取る事になりました。皆が納得して、この人たちを許せる事ができたら、お姉ちゃんは、この人と結婚しなければなりません。」

一同、困惑。

「お姉ちゃんとの結婚なんて、絶対に認めん！ 誰が許せるものか
!!!」

子供達は皆、その様に思った。

< 平和の中の悪 >

頭の意向で教会に手をつけるのを止める事になったギャング。

この意向には『ギャング一同、子供達に優しくする』という意味を込められ、実質的に活動休止状態。

束ねられなくなつたギャングは一同思い思いの行動をするが、頭を崇拜する者と、そうでない者とで争いが起きた。

元もと悪に染まりきれない者は頭の意向には賛成で弱者を狙うのは美徳に反していた。

一方の悪はそんなの関係なく、弱者でも構わない。

2つの悪は派閥に別れ、分裂し、バラバラとなるだけだった。

その中でも悪に染まつてる悪は、6番街において、頭の見えないところで悪事を働いた。

< ヤシと教会の新人幼児6歳と悪 >

ヤシと幼児は一緒に買い物に出かけていた。

シチューや練り物の材料となる小麦をスーパーへと買い付けた。その帰り道にて事件は起きた。

ギャング達のうさばらしである。この時はまだ、頭の命令が発動される前の段階である。スーパーの外にて

3人組み絡まれるヤシと幼児

「おやおや、君達は何を買ったのかな」

しゃがみ込みなれなれしくヤシと幼児の肩に手を回す。

身長170cmに対して1m程度の子供達は男達に囲まれると、スパーの中からもまた、大通りからも見えない。死角となってる。逃げようとする2人をナイフで脅し、逃がさない。悲鳴も上げさせない。恐怖する表情を見て楽しむ。

だが幼児6歳は恐怖しなかった。

果敢に抵抗して、ヤシを守る為にヤシ前に立ちふさがる。

そして頭をどつかれる幼児。

自分には何もできないヤシ。いつもお姉ちゃんに守って貰うヤシ。

悔しくて、情けなくて悲しくて、今回は、自分より遙か小さな子供に守られてる。

そんな自分が嫌で動く。

幼児が抱きしめ大声叫んだ。

刺されても構わない。死んでもこの子だけは守ると心に誓い。

ギャング達は根負けして逃げ出した。

<ヤシと幼児の絆>

幼児は親に虐待を受けてつづけ、生きる為に、そこから逃げだした。けれど路頭に迷い。コンビで万引きをしようお菓子を小さな手に忍

ばせた。しかし、それを店の人に見られ引き止められ、恐怖で逃げ出した。その時、お菓子は置いていってしまった。どこにも行くあてが無くてスーパーの裏（人目に付かないところで泣いていたら、教会の子供達がおつかいの帰りに、その泣き声を辿り見つけ教会へと連れて行く。

そこで幼児はお菓子が貰えた。何もしていないのに貰えてしまった。幼児にとってはそれはカルチャーショックだった。

何もしなくても罰が与えられるのが常識だった幼児にとって、なにもしていないのに罰ではなく幸福が得られた。

万引きという悪さをして、見つければ大きな罰を与えられると思い込んでいた幼児。泣けば叱られ罰を与えられるのが常識と思い込み人の居る場所では泣くのも恐怖。その恐怖から生まれて初めて開放された。

人生観が180度変わった。教会の者達の為ならば命などイトワナイ覚悟が無意識の内に作られてた。

後に、それが要因でヤシの勇気が試され動き出させ、2人の絆が生まれる。

< 復讐心 >

頭の元女は苦悩してた。

彼女は頭が沢山犯した女の中で唯一、頭を男として本気で好きになつた者である。

しかし、幾ら彼を求める気持ちがあっても彼は振り向いてくれなく

なつた。

彼は教会に足しげく通いつめ、物に成らないアンに熱を上げた。

彼女は彼に、『騙されてる』と忠告したものの。

『騙す様な女なら、抱く価値も無い』と言いのけ、相手にしてくれない。

そして彼女にとっては、それ以上、彼を求められなかった。

彼女にとって彼は神の様な存在だった。

悪に支配されたストリートチルドレンの世界で、彼女は日々、男達の暴力に耐えていた。

その極限の状況にいた彼女を彼が救った。

遠くから来た彼のギャング達は、彼の指示の元に彼女を助け、独占した。

これまで、人生の不幸と比べて余りも良い。安全は彼に保障された様なもので、欲しいものがあれば何だつて買ってくれる。

支配されていても、彼女にとってそれは最大の喜びで、絶対的なものだった。

それが今、奪われている。

目の前で見せ付けられている。

憎悪する。

彼女にとって神である存在である彼は、全ての人間から崇められなければいけない存在である。

なのにアンは、彼からの求めを断る。

神を否定する行為であり彼女自身が否定される気分となる。

女として彼を独占したいと思う自分と、逆に、アンが彼に抱かれるのを肯定する自分が居て、2つ相反する葛藤が彼女の脳内でループした。

そしてそのどちらも肯定する答えを導き出した。

「アンを殺す」

彼女にとっての答えは、彼女にとって正しくて、全ての悩みを解決する唯一の方法であった。

その答えを誘発させてしまったのが、悪Bだった。

悪Bは彼女に殺人を提案してきた。

悪Bによると自分の配下にある手下たちは、平和ボケした頭に対して既に不満を持っている。

頭を殺せば、仲間の怒りを買うがアンを殺せば問題なく。また、たやすい。

悪Bの提案に載せられた彼女は、アンを人知れず呼び出した。

<処刑>

この先は悲劇のみです。

ぶっちゃけ悪Bとその配下に良いように弄ばれた拳句にアンは殺されれます。

ありとあらゆる苦行を強要させられ、それが出来ないならばと、アンの目の前に用意した人質ヤシを使う。そして恐怖の見せしめとして教会の新人幼児6歳も使い人質とした。

幼児に対しての暴行が、アンとヤシにとって何よりの苦痛だった。

ヤシはギャングから自分を救おうと頑張った幼児との人生の貴重な体験が絆として深くある。自分の弱さを克服した最高の記憶装置。それを失う恐怖。

そしてアンを失う事に対しても同等の恐怖を味わう。

アンは強制される苦行に耐え、そしてヤシはその苦行を見しまい絶望する、

「子供達だけでも助けて」と命乞いするアンを尻目に悪は欲のまま、幼児を殺した。

これで一番、傷付いたのはヤシ。ヤシにとっては、お姉ちゃんの次に必要な存在だった。

その絶望の表情はアンを超える。お漏らしを始める。涙が止まらず、発作を起こした。

パニックで脳から消したい思い出が生まれる。だが今、起きてる出来事を幾ら否定しようとも。否定を意識すればするほど、目の前の現実を意識してしまい脳が受け入れられない。記憶が不幸な映像で埋め尽くされる。大切な絆の思い出を侵食し脳内を電気信号が滅茶苦茶に駆け巡る。

記憶のバッファオーバーフロー現象を引き起こし、脳内の記憶領域が確保できなくなつた。その行き場を失つた電気信号が体へと作用し、お漏らし、発作が加速する。

悪達は、その光景を大変面白がり、アンを殺したらどうなるか試した。

アンは殺してはいけなかった。全ての希望と大切な思い出の記憶をヤシから全て奪い去つた。

ヤシの中で世界の時間が止まった。

その光景を頭の元女は罪の意の識苛まれながら見る事しかできない。

この罪の時間は永遠に元彼女を支配する。輪廻を何度繰り返しても償いをし続けるだろう。

おしまい

つじつまが合わない話2（後書き）

ラストのバッファオーバーフローとは、コンピュータの^{メモ}一時的記憶領域のエラーの関わる用語である。

何らかの不適合なデータをメモリ上に送るとコンピュータは誤作動を起こしてしまう。

セキュリティ向上の為のハッキング技術では、この誤作動を見つけ対応策を講じていくものである。

一方や犯罪におけるハッキングはクラッキングと呼ばれ、誤作動を見つけ出し、その誤作動の仕組みを利用して犯罪を行う。

ハックもクラックも犯罪の間を見つけるという意味で同じ行為であるが、行う者は完全に正義と悪が2極分化していると言っていい。これほどシンプルに正義と悪が集まる仕組みは無いと言えるが、嘘も方便。

罪として裁かれる犯罪でも正義を成していればOKという正義的信念もある。

物語としてオレ自身はコードギアスの様な正義の貫きは面白いと思うし、デスノートも面白いと思う。

一番好きな悪の貫きは『女王の教室』

ドラマにしては、妙なりアリティがあるというか、とにかくスペシヤル編が最高だった。

これを超える必要悪など、オレは存在しないと思う。

人は誰かの為に悪人として成り下がれるものだと思つづくと思う。

俺の親にしてもある意味で必要悪を演じてくれたのだが、余りにも苦痛だった。

それで世界の事情による運の無さも作用した。

その苦痛から覚めるができたのは、物心がついてから20年という、オレにとっては余りにも長すぎる時間だったと思う。

今日、生まれて初めて親達と本当のクリスマスを過ごした気分である。

ヤシとアンの真実

十字架に張り付けにされ、処刑される3人が要る。

真ん中にキリスト、その左右に男一人ずつ貼り付けにされている。

参考資料、絵付き キリストの磔刑

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AD%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88%E3%81%AE%E7%A3%94%E5%88%91>

槍が、まず右の男突き刺さり息絶えた。

次にキリストの腹に突き刺さった。

そして左の男にも突き刺さる。

キリストは意識はまだ、残っていた。

左の男が殺されもがき苦しむ光景を見ていた。

とても悔しい思いで世界に憎悪を向け、そして友を失う苦しみを最後まで味わった。

そう・・・まるで今のヤシ達のように・・・

<ヤシとアンと幼児の宿命>

雪の降る夜、2人の夫婦が赤ん坊を抱いている。

路地を抜け教会のドアを開ける。

中に入り、神父に挨拶をし、神に祈りを捧げる。

「では、ごゆつくりと・・・
神父は奥のの部屋で書きものを始める。

夫婦は神に祈りを捧げると、祭壇の上に子供を置いて立ち去る。

しばらくのときが流れ、赤ん坊は泣く。しつこいほどに

その声に気づき神父は、事の次第を悟る。

3年後

女子AtOB5歳がヤシが路地の入り組んだ道でかくれんぼをしている。

ヤシが鬼で、AtOBが隠れ終わり「もういいよ」という合図をしたらゲーム開始をする。

だがAtOBは隠れようとせず、そのまま家に帰る。

A「はは、置いてきちゃったW

B「えへ、置いてきちゃったW

その路地裏は、AtOBに誘われて、ヤシにとってはあまり知らない場所だった。

誰もいなくなり、寂しくなったヤシは、AtOBの名を呼ぶ。

行く当てもなくさ迷っていると、もう家に帰れないだと悟り泣き出す。

そこへ、神父が現れる。

「一体、何があつたんじゃあ？」

事情を説明するヤシ。でも、たどたどしく、何を言っているか伝わらない。

「大丈夫。もう、心配ないから。とにかく帰ろう。

ヤシ手を引いて教会への道へと歩く。

教会に戻ると、祈りを捧げる人が居る。

「おや、めずらしい。

その人は女の人は、ヤシ達の顔を見るなり、挨拶も無く走り去っていく。

神父とヤシは頭を傾げた、

ヤシと神父は町を歩き、一件にずつ家を訪ね。祈りを捧げてもらい。物乞いの様に食べ物恵んで貰う。パンを貰う。

教会にて小麦を溶かしてシチューを作る。

夕食のスープを目の前に神に祈る。

食べるヤシと神父。

翌朝、教会に、昨日の女の人があらわ得るが、しかし、ヤシたちに見えない様に遠目から見守る。

ヤシは外路地にてA t o Bと頭をぶたれて泣いている。
それを見た、女の人は現れ、A t o Bに拳骨をかまします。『苛めち
や駄目でしょう』
女の人はヤシに対して、頭を撫でている。
「ばいばい」
と挨拶をして去る女とヤシ。

帰り際、女は咳き込む。

翌日

女はまた、ヤシの元へと現れ、隠れんぼをして遊んだ。
その次の日も、そのまた次の日も、ヤシと遊んだ。

そして、ある日を境に、女は来なくなる。
人気の無い路地で待つていれば女が来ると期待していたヤシは悲し
かった。

<大まか設定>

ヤシの両親は親戚の不幸があり、やむなく子供らを引き取った。し
かし、家計は火の車。既に生まれた赤ん坊^{ヤシ}を育てる余裕が無いと判
断した両親は教会へと捨てた。
アンとヤシは実の姉妹で、先に生まれていたアンは自分のせいで、
ヤシがすてられたと責任を感じていた。3年後、父親は他界し、そ
の看病疲れで母親も病気になりつた。

母は死ぬ前に捨てた娘に会いたい思い教会へと行った。

その後、母の病気は悪化しアンは死ぬ前に捨てた子ヤシを合わせてやりたいと思った。

生前、父が死ぬ間にアンに捨てた子が要るとしてアンに聞かせた。秘密も持ったまま死ねなかった。

そしてアンは教会に行き、ヤシを実家へと連れて行った。

だが当時3歳だったヤシと9歳だったアン常識が無かった。

神父に許可を取らず誘拐に近い形になり神父はあわてて探した。

その際、吹雪の中を探し回り風邪をこじらせる

アンは母親の為にした事だが、母親は直にでも返すのだとアンを叱った。

アンが教会にヤシを返しに行くと、神父は風邪をこじらせてる。

アンは自分のしでかした事を告白し神父は笑って許してくれたが、帰るとき、Atob5歳から、神父がヤシを探しに雪に打たれて風邪をこじらせた真実を知らされる。

神父を風邪にした罪を感じたアンは、ときどき見舞いに行き、神父は元気になった。

ヤシとは何度も合い遊んだ。

その後、アンの母親は死んで遠縁の親戚に引き取られる事になる。

当時の3歳のヤシを連れて行きたいと親戚に願い出たが聞き入れて貰えなかった。

アンはやむなく、ヤシを置いて行ってしまった。

その3年後、アンは神父が風邪の噂で病に伏せていると聞く。

気になり教会へと向かい、そこでヤシと再開した。

アンはこの時12歳、悲しみにくれるヤシを見て、いてもたっても要られずにヤシの前に出て行った。

ヤシの引き取りを今の家族に頼んでもヤシの存在は認めて貰えなかった。

アンは止む無く決意し、ヤシと一緒に暮らし始める。

姉妹である事實は、あえてヤシに告げなかった。

なぜ、今まで迎えに来なかったと問われるのが嫌で、アンは罪の恐怖を感じていたのだ

どちらにせよ、アンは母親になる事を決意している。

生きるために、他人の家に出向き、手伝いをしたり、葬儀の祈りをしたりと、その見返りに金品を受け取りながら、かつかつ生活をした。無論、物乞いの様なもので、沢山の人に疎まれた。

そうやって、アンとヤシは色々な家を巡る過程で、見放された子供を拾い同士としていった。

虐待を受けている家庭から助けたり、今にも餓死しそうな子を救助したりした。

ストリートチルドレンの中にはマンホールの下で湿気に帯びた生活をしている者もいて、片っ端から、一人でも生きていく術を教え込んだ。

そして教会をストリートチルドレンの巣とさせた。

しかし、最終的にギャングに殺される運命である。

この運命はキリストと良くにているのだが、関連性があるかは誰にも判らない。

この物語はフィクションであるし、キリストについては昔過ぎて誰にも真相は判らない。この物語は、あくまでキリストから変わらぬ宿命が輪廻してもなお続くのを表現した。

ヤシとアンの真実（後書き）

なんとなく見つけたので・・・

『プロジェクト：キリスト教』 興味無い人が多いです。オイラも興味ないのだけれど、なぜか紹介してる。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%82%AF%E3%83%B9%E3%83%AD%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6451p/>

『模倣小説』 雪天使 ~お前に捧ぐカノン~

2011年1月1日00時03分発行